



(写真左上から)
 ・本から花の絵を切り抜いて貼った掛け紙
 ・味を確かめながら調理します
 ・献立も一緒に渡します
 ・調理の前に献立の説明を聞きます
 ・保冷バックに入れて配達。夏は保冷剤を入れます
 ・皆で盛り付けをしていきます

見守りから始める

お弁当で生活支援・見守り
 「こんにちは、もつてきたよ」と、お弁当片手に大きな声で挨拶するのは松浦重富さん(真木)。毎週火曜日、社会福祉協議会が町の委託を受けて実施している「配食サービス」のお弁当を、利用者の自宅へ届けています。

このサービスは、利用者の食事の支援はもちろん、見守りも兼ねています。お弁当の配達に合わせて、利用者の方と自然に関われるためです。また、1人暮らしの場合、二日中誰とも話をしないということもあるため、そういった方のお話を聞くこともできます。お弁当の配達には、2通りのボランティアがあります。ひとつは、松浦さんのように、毎週配達がある友愛訪問活動。もうひとつは配達ボランティアです。前者は、町内に12人のボランティア。後者は、約120人のボランティア登録があり、交代でお弁当を届けます。一人当たり、年に1〜4回程度の配達の順番が回ってきます。

松浦さんが、友愛訪問活動を始めたのは70歳の頃。さかのぼること5年、65歳の夏、仕事中に脳卒中で倒れ、左半身に麻痺が残り、その影響で、一時は運転免許が取り消しになりました。しかし、それから4年かけて、リハビリを行い、免許センターにパスで通い、69歳のとき再び運転免許を取得しました。「みんなが心配して、『大丈夫かね。気を付けなさいよ。がんばりなさい』と励ましてもらうて、障がいのある私をずっと支援してごいた。飯南町はいいところだなあと感じとった。何か役に立てればと思っていた」

松浦さんは、自宅から比較的近い4〜5世帯に、お弁当を届けています。まずは、来島保健センターにお弁当を取りに行き、そこから各戸を回ります。

お弁当を持つていくと、家の中におられる気配があっても、なかなか返事がないこともあるそう。昼寝中だったり、畑で作業中だったり、入浴中だったり理由はさまざまですが、松浦さんは、「いつもと違う」と感じるようなら、社協に連絡するようにしています。ほぼ決まった家に行くので様子が分かるためです。

「見守りにもなるし、やりがいがある。ありがと、ありがと。言うて喜んでくれてだけえ。玄関に置いてくだけじゃのうて、声を掛けたら玄関まで取り出でて。私も役に立つとるんかな思うて、うれしいよ。家族には心配をかけるのかもしれないが、運転ができる限り続けていきたい」

その香りは、調理室から。作られているのは、「配食サービス」の利用者に届けられるお弁当です。実は、お弁当もボランティアの手によって作られたものだったのです。

この日のお弁当のメニューは、炊き込みご飯やポテトサラダ、大根と柿の酢の物、焼き魚など。栄養バランスはもちろん、季節の食材を取り入れ、利用者の方

自分でも調理できるよう、作り方や材料を書いた献立も一緒に渡します。また、味つきご飯が苦手な人には白ご飯、魚の切り身が大きければ小さくほぐして、利用者それぞれに配慮して作られています。

また、お弁当にかける掛け紙は、保育所や中学校のほか、多くの団体、個人がボランティアとして関わっています。



ていねいに調理をしていきます